

之を遮断せんとして其準備を行ふ間に八夏の間は露軍の激戦を以て拘束さるゝ間に第一軍は太子河岸に集結し其架橋を行ひ以て抵抗を受く

二月八日時事

タイムスの日露

戦争批評 (百四)

日本第二軍の渡河

大山元帥は去る水曜日(八月三十一日)を以て重ねて遼陽の陣地に其攻撃を加へたり

露軍の激戦を以て拘束さるゝ間に第一軍は太子河岸に集結し其架橋を行ひ以て抵抗を受く

之に投合せり此等の兵即ち露軍の渡河を掩護せんとするものなりとす一箇師團の兵既に

勝利を得たることを知る其一時的勝利に止まるは日ならずして之を證明し得る時あるべし

露軍の激戦を以て拘束さるゝ間に第一軍は太子河岸に集結し其架橋を行ひ以て抵抗を受く

之に投合せり此等の兵即ち露軍の渡河を掩護せんとするものなりとす一箇師團の兵既に

タイムスの日露

戦争批評 (百五)

両軍集軍隊の兵力

周密に戦役の経過に其注意を加へ來たらざりし人々の爲め此東盟の大會議に加はりたる露軍の兵力を略叙するは亦事に便ならずとせず

大隊及び砲三十二門より成る第一、第二、第三
第五、第六、第九の東部西比利亞軍團と
全然豫備兵より成る第四、第五西比利亞軍團
及び歐羅巴露西亞より來たれる第十、第十七
常備軍團及びその附屬砲兵を有せり將軍は又
専らコサツク兵より成る強大なる騎兵隊を有
す多くは東方のコサツク村より徵募されたる
ものにして其總數約一萬八千に達す之に加ふ
るに對壕兵六箇大隊、榴彈砲三箇中隊、擧付
巨砲若干、諸種の軍需品に兵若干等あり
過去六箇月の間屢々此紙上に書き立てたる所
を反覆し一〇〇其各單位を數へ上ぐるは要
するに其煩に堪へず是を以て其損害數を引
去り別に相當の病兵數を見積り八月二十三
日に存したる野戰軍の兵數を以て十六萬人
とし内より八月二十三日より同三十日に至る
までの損害數六千を控除せば即ち殘兵として
十五萬四千の數を認むるを得べし但し之
を計算するに於て露國よりは何等の援助を受
くるも能はず唯だ各單位の推定兵力と西比
利亞鐵道の軍隊輸送力とに準據したるものな
るを以て自ら多少の誤算なき能はざるべく之
に其正確を誇稱するも能はざるなり
東京よりのロイナル電報は露國野戰軍に關
する日本の略算を以て十五萬人と爲せり即ち
我等の推定したる所と略ば同數なり双方とも

或は誤れるも無き能はざるべしと雖も日本
の參謀部が自家に取りて斯くの如くに重要な
問題に對し甚だしき誤謬を爲すべしと之
を信する能はざるなり軍隊に附屬する砲門數
には頗る疑なき能はず蓋し豫備軍團雖も其隊
に相當する砲兵を有するや否甚だ不明確なる
を以てなり理に於てはクロバトキン當に六百
門の砲を有せざるべからざるなり然れども斯
く多數の砲を備ふるもは殆ど之を期すべか
らざるに似たり此點は實に西洋諸國に於ける
觀察者の其斷定を下すに最も難んずる所なり
とす
大山元帥の軍隊に關しては之が兵力之が配
置とに嚴密の觀察を加ふるを以て我等は終始
日本の同盟國の爲すべからざる所なりとし未
だ曾て論らざるものなり然れども日本の軍事
上の秘密を以て到底探り出すも能はずとす
るは斷じて誤なり能力ある漢報部は文明の各
資源を利用して其知らんと欲する所を見す
るに決して難きを感ぜざるものなり
唯だ開戰當時に於ける動員濟の日本現役軍隊
は其補充兵を併せて三十四萬人即ち兵站基
地軍隊及び衛戍軍隊を合算して五十二萬人、
千三百六十八門なりしものと之を心に記して
可なりとす旅順口の損害は暫く時機を待ちて
之を知るの外なしと雖も野戰軍の損害は約

一萬五千にして外に病兵に對して若干の控除
は即ち右の兵數に加へられざるべからざるな
り
我等は最も信するに足るべき露國側の略算を
茲に掲出し置くに止むるを以て其最も可なる
を見る即ち近日露國の陸軍各司令部は大山の
兵力を以て廿二萬人、旅順口の攻圍軍を以て
十萬人と爲したるものと、皆人の知れる所なり
此軍司令部なるもの必ずや露國省の有せる各
情報に通曉し居れるものならざるべからず此
數當たれりや否や若し當たれりせば本年の
戰役の其大詰を演せんが爲め右の攻圍軍中よ
り幾許の軍隊果たして北上せしめられたるや
是れクロバトキン快戦の決を加ふるに當たり
て先づ探らんむと欲する所なるべし日本
にして若し其意志を有せば其敵に優れる兵力
を集むるに堪へたるものなるも及び此事實
の露國に充分知れ渡り居たるものなるもは
明に之を斷定するを得べし勿論東亞には又他
の露國軍隊存せざるにあらざれば鐵道守備隊及び
國境守備隊の外別に數箇の大衛戍隊及び小衛
戍隊存せり之が兵數は屢々之を紙上に論じたり
然れども此等は甚だしく事局に其勢力を加
へ得たるもとあるなし鐵道線路上には又増援
隊の既に途にあるものあり第一軍團の先頭部

隊は早く奉天の南に達せり獨逸皇帝の聯隊長
たるゾイホルグ聯隊また機に及びて既に軍に
投合を得たるやの説あり
心意の原子をも推考中に加へて現時の形勢を
判すれば我等は其判盡く日本側に存するを斷
せざるべからず六箇月に亘れる戰役中露國は
唯だの一回たりとも陸海兩面に於て未だ其勝
利を占め得たるもとあるなしクロバトキンの
軍隊中その新着の第五西比利亞軍團及び是迄
未だ交戦したるもなき第十七軍團の第三師
團の外に一單位として敗戦の經驗を有せざる
ものなり或は一回或は二回或は三回の敗戦を
重ね其大部分は亦砲をさへ失ひ居れり
露兵は原來不撓の戦員にして大陸國多數の軍
隊に比しては敗戦の爲めに其意氣を阻喪せし
めざるものなり然れども斯くの如き連戦連敗
の結果に至りては其意氣に及ばず所言を用ひ
ずして明なり然るも露人が東洋に對する西洋
の優越を思ふの念は深く其心裡に浸み込み居
り六箇月の敗戦を以てするも容易く扱く能は
ざるものたるは亦之を記憶せざるべからず是
れ確に一箇の回復力にして我等必ず之を輕視
すべからざるなり露兵は今此等の諸點につき
て如何なる感想を抱くに弄りたるや我等未だ
其實情を知るも能はず如何なる通信員も亦

未だ曾て之を報じたるもなし露兵は其過ぎ
たるを憂ひしむる迄に勇氣に富めるものなり
然れども決して智慮あるものならず又頗る
迷信に富むイヅアン(露人に多く見る名)は其
野營地に於て其戰友に如何なる言を爲し居れ
るや彼は今尚ほ無禮なる異教徒を以て日本
人を呼び復讐を口に居れるや或は彼等互に
相私語して日本兵を惡魔の生れ變はりとし
露國の彈丸之を其能はず露國の銃槍また此
嶋國民の魔法に依りて其銃を失ふに至れり
稱し居れるや露兵の心中癡み知らるもとす
我等決して將來につき的確なる豫想を下すも
能はず通信員の此方面に關する報を傳ふる
は最早や當に其時たるべきなり
二月所論
十一月十四日
十一月十四日

○タイムス日露 戦争批評 (百六)

國民の士氣 (二)

其敵に對して物質上その優を制するも共に道
義上また其優を制するにあらざるよりは國民
は決して戦争の技術に於て其名を爲さん
を豫期し又之が目的を達するも能はず兵數

物質、土地、富源、武器または鐵勇を以てす
と雖も之が行動を支配する道義上の主義堅く
其根柢に入り人間性情の動もすれば鈍らんと
するを奮興し功勳を獎勵し勝つて驕らず敗れ
て挫けざらむるにあらざるよりは未だ以て
國民に戰勝の名を爲さしめ又之を維持せしむ
るも能はざるべきなり
愛國心、宗教心、熱狂心、三は即ち過去の
時代に於て大武功を遂げしめ且つ平和の技術
に於て大成功を爲さしめたる大原動力たりし
ものなり暫く武功の上のみにつき之を云は
んか羅馬人及びラセーモン人を刺戟し得た
るものは即ち愛國心にして宗教心の著しき事
例は即ち夫の十字軍にあり熱狂心の例に至り
ては又之をスーダンに於て我等の銃槍に抗じ
たる彼の野蠻人に之を見るを得たり彼等はハ
ーターゼ、ハーミット(十字軍の首唱者)の
絶叫に應じたる諸勇士の熱練は即ち之を有せ
ざりしと雖も亦之に比すべき勇氣は之を有せ
ん目の及ふ限り茫漠たる平原はカリフア(王)
の大兵を以て充ち彼等隊伍を整へて肅々其運
動を行ひエミール將の戰旗驕風に飄き騎士の
の雪自の小旗を翻じてエーヘル、スルガ
ムの頂を渡る朝暉その刀槍を照らして冷光の
輝たるものあり之を見たるもの誰ありてかオ
ムゾールマンの光景を回憶して之を壯なりと